

二〇二五年度学位授与式 学長式辞

卒業生・修了生のみなさん、本日は、誠におめでとうございます。また、ご家族の皆様におかれましても、この佳き日を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

みなさんが本学で学んでこられた数年間を振り返りますと、その出発点は、新型コロナウイルス感染症という、だれも経験したことのない困難のただ中でありました。授業のオンライン化、行動の制限、対面で語り合うことの難しさ――そうした制約のなかでも、みなさんは工夫を重ね、学びを止めることなく歩みを進めてこられました。その経験は、知識以上に大きな「力」として、これからの人生を確かに支えてくれるはずです。

さらに広く二十一世紀という時代を見渡しますと、みなさんが生きてきた期間は、決して平穏なものではありませんでした。二〇〇八年のリーマンショックは世界経済を揺るがし、日本社会にも深刻な影響を与え、努力だけでは乗り越えがたい現実を突きつけました。二〇一一年の東日本大震災は、自然の圧倒的な力の前に人の営みの脆さを示すと同時に、支え合うことの意味を私たちに教えました。そして近年のコロナ禍は、学び方や働き方、社会のあり方そのものを根底から問い直す契機となりました。いずれも本学にとっても大きな影響を与えた出来事であったことと思います。これらは、「二十一世紀の負の出来事」と呼ばれるかもしれません。しかし、重要なのは、それらが単なる不幸な歴史に終わらなかつたという点です。困難の只中で、人は考え、社会は変わり、価値観は更新されてきました。危機は、私たちから未来への可能性まで奪うことはできなかつたのです。

このような時代を生きるみなさんに、イギリスの詩人ラドヤード・キプリングの詩「If―(もしも)―」の一節を贈りたいと思います。

夢を見ることがあっても、

夢のとりこにならず、

考える力を持ちながらも、

考えることだけを目的にしないなら

成功と失敗という

二つのかりそめのものに出会っても、

どちらにも振り回されず、

同じ心で向き合えるなら

自分の語った真実が、

悪意ある人によってねじ曲げられ、

人を陥れるための言葉に変えられても、

それに耐えることができるなら

また、人生をかけて築いてきたものが

壊れてしまうのを目にしても、

身を屈して、

すり減った道具でそれをもう一度

築き直すことができるなら

この詩が教えているのは、思いを行動に結びつける強さであり、成功にも失敗にも過度に呑み込まれない節度、そして壊れた現実を前にしても、再び立ち上がる覚悟です。これから社会に出るみなさんは、必ず称賛と批判の双方にさらされるでしょう。そのときこそ、自分自身を見失わず、静かに、しかし粘り強く歩み続けてください。

キプリングの詩は、次の言葉で結ばれます。

そうすることができるとなら、

世界とそのすべてはあなたのものとなり、

そしてそれ以上に、

あなたは一人前の大人になるでしょう。

この「一人前の大人」とは、肩書や地位を得た人のことではありません。困難から逃げず、他者への責任を引き受けながら、自らの足で立ち続ける存在のことだと、私は理解しています。卒業は終わりではなく、新たな始まりです。どうか学ぶことをやめず、問い続け、失敗を恐れず、みなさん自身の人生を築いていくてください。本学での学びが、その確かな礎となることを、心から願っています。

改めて、みなさんのご卒業、ご修了を祝し、今後の人生に多くの実りと幸福があることを祈念して、私の式辞といたします。

二〇二六年三月一九日

成蹊大学長

森 雄一